

(新潟県)

若者が帰って来られるまち・住み続けられるまち！ 《雪へのこだわり》で目指す持続可能なまちづくり

雪国の原点《雪》へのこだわり

南魚沼市を訪問したのは、ゴールデンウィークも間近い4月20日・21日のこと。晴天に恵まれた20日の午後、市内を流れる魚野川の河畔や丘陵部では、桜の花がまだ満開に近い状態を保っていた。

地元の方の話では、市街地の桜は満開のピークを数日前に終えていたようだ。しかし、魚野川河畔ではまさに雪国・南魚沼市ならではの《春爛漫》の光景が展開されていた。

南魚沼市のある魚沼盆地を貫流する一級河川・魚野川の河畔は、沿岸の各自自治体が例年、要所要所を《雪捨て場》に活用している。取材者は魚野川の土手を彩る桜並木の真下に設置された雪捨て場で、バックホー（建設重機）による残雪除去の場面に遭遇したのだ。

5月も間近い時期の魚野川河畔で、満開の桜越しに見る残雪除去作業……。これは世界

有数の豪雪地帯ともされる魚沼盆地および周辺部を含めた《魚沼地域》（南魚沼市、魚沼市、十日町市、小千谷市、湯沢町、津南町、長岡市川口地区の総称で、地域全体が特別豪雪地帯指定）の冬の長さ、遅めの春爛漫、そして今風の表現を借りれば「半端ない降雪（積雪量）を合わせた象徴的風景の一つ、といえるのではないだろうか。

例えば、昨年12月から今年3月までの冬期に大雪を原因とする災害救助法が適用された事例は、内閣府の統計によれば秋田県、新潟県、富山県、福井県で計24件あった。そのうちの8件が新潟県内（南魚沼市、湯沢町、長岡市、十日町市、糸魚川市、妙高市、上越市、柏崎市）の大雪による災害および災害を引き起こす危険性に対するものだった。中でも大きな話題となったのが、昨年12月16日から降り始めた大雪による、南魚沼市と湯沢町の事例だ。

関越自動車道の南魚沼市・湯沢町エリアで、約1100台の車両が52時間立ち往生、翌17

はやし しげお
林 茂男
南魚沼市長



日に南魚沼市と湯沢町に災害救助法が適用された。車中に閉じ込められたドライバーに、自衛隊員や高速道路会社社員が飲食物や簡易トイレなどを配布する様子が、メディアに刻々と報じられたのも記憶に新しい（他の6市への災害救助法適用は今年1月10日、連日の降雪で家屋倒壊の危険性が生じたための事例）。

南魚沼市は平成16（2004）年11月1日に旧・南魚沼郡六日町と大和町が合併し、新市としての歩みを開始した。さらに翌平



毎年10月の南魚沼地域合同除雪出動式は雪国・魚沼地域の魅力発信イベントも兼務



満開の桜の下で行われていた雪捨て場の残雪除去作業



霊峰・八海山をはじめとする越後山脈と魚沼丘陵に挟まれ、魚野川が貫流する魚沼盆地周辺は世界有数の豪雪地帯

「ただ、温暖化など地球規模の環境変化のせいでしょうか、近年は私たちの地方の雪の降り方も一定ではありません。例えば令和2年から3年にかけての魚沼地域はドカ雪が降りました。令和元年から2年にかけての冬は、スキー場が営業できないほどの雪の少なさでした。今年3月1日の段階では3

年間累積降雪量が10m超となることも全く珍しくない。
 一方で、温暖化など地球規模の環境変化のせいでしょうか、近年は私たちの地方の雪の降り方も一定ではありません。例えば令和2年から3年にかけての魚沼地域はドカ雪が降りました。令和元年から2年にかけての冬は、スキー場が営業できないほどの雪の少なさでした。今年3月1日の段階では3

雪日(積雪がゼロになった日)を見ると、本庁舎周辺が3月31日、大和庁舎周辺が4月3日、塩沢庁舎周辺が4月7日となっている。このように南魚沼市の市街地は毎年、12月初旬の初雪から約4カ月間(長い時で5カ月間以上)にわたり、雪景色に覆われるのを常としている。
 市街地の積雪が消えても、雪捨て場に大量に積み上げられた雪は、取材者が魚野川の河畔で見たように、ゴールデンウィーク近くまで残る。山間部の積雪は自然に溶けていくが、高所や日陰になりやすい場所では初夏に至るまで残る。程度の差は年によってあるものの、それらは南魚沼市をはじめ魚沼地域全体に見られるいつもの光景だ。年間累積降雪量が10m超となることも全く珍しくない。



詳細は後述するが、林市長は就任以来、世界有数の豪雪地帯に位置する南魚沼市および

伝統の雪室がもたらすSDGsへの道

「雪へのこだわり」《若者が帰って来られるまちづくり》が、就任時から一貫する林市政の「基盤であり、基本理念(林市長)だ。
 序の周辺に150cm〜200cmの積雪がありました。昨年3月1日の時点で消雪していましたが、ほとんど降らないか、やたらと降るかという具合に、振幅が極端に大きいのが、魚沼地域における近年の雪の特徴です」
 そう語る林茂男南魚沼市長は、スキー場である石打丸山観光協会で長く観光振興に携わり、市議(2期)を経て平成28(2016)年11月に市長に就任、現在に至っている(2期5年目)。

成17(2005)年10月1日に旧・南魚沼郡塩沢町を編入し、現在に至っている。
 新市発足に当たって、南魚沼市は旧・六日町庁舎を本庁舎とし、大和町および塩沢町の旧庁舎を支所とした。この3カ所の市役所庁

舎周辺の今年3月1日時点の積雪量を、南魚沼市公式サイトの《積雪情報欄》で見ると、本庁舎周辺が158cm、大和庁舎周辺が203cm、塩沢庁舎周辺が178cmだった。同じく消雪日(積雪がゼロになった日)を見ると、本庁舎



2月に雪入れされた雪室は酒類・食品類などを通年で熟成冷蔵(写真提供/清酒・鶴齢で知られる青木酒造)

南魚沼市や魚沼地域には、その可能性が大きいとあります。私が市長選に出たときのスローガンの一つは《若者たちが帰って来られるまちづくり》というものでした。進学や就職で

魚沼地域全体を持続可能なまち(エリア)として存続させるキーポイントは《雪の産業化》であると発信し続け、その実現を目指すための事業を多角的かつ精力的に推進してきた。「昭和も前半期までは多過ぎる雪をどう克服するかという《克雪》が雪国の大きなテーマでした。昭和の後半期に入ってから雪をどう活用するかという《利雪》がテーマになりました。そして平成に入ると豪雪をポジティブに捉える《親雪》が唱えられるようになりました。今もそうした流れはベースにあります。

しかし、私は親雪という考え方もたらしめた雪の産業化からもう一歩も二歩も踏み込んで、SDGsの潮流にのって構築する持続可能な循環社会の主役にしていきたい。南魚沼市を中心に、それを魚沼地域全体で推進できたらいいなと真剣に考えています。

故郷を離れた若者たち、かつての私もその一人でしたが、彼らが安心して帰って来られるふるさとづくりをしたい。その肝になるのが雪の産業化なのです。

昨年11月の2期目の選挙の際には、かなりそれを前面に出して訴え、幸いにも市民の皆さまの支持をいただくことができました。2期目の残り約3年間はいいよいよ、その具体的な仕組みづくりにまい進していくつもりです」(林市長)

林市長の推進するSDGsの潮流にかなった雪の産業化の主役は、伝統的な《雪室》の活用だ。雪室は北信越・東北地方などの豪雪地帯で伝統的に行われてきた雪の活用法の代表的存在で、冬の間大量に降った雪を貯蔵する建物を指す。雪室の内部は低温・高湿度に保たれるため、食品の鮮度保存だけでなく熟成の効果もあることなどが、各種の科学的分析によって証明されている。

また、空気清浄化の効果も持つ雪の冷気を活用した天然冷房は、排出ガス・ゼロの超エコタイプのクリーンエネルギーとして、近年特に注目を集めている(送風機などからは排出ガスが若干出る)。

雪室に関しては新潟県、特に南魚沼市をはじめとする魚沼地域や上越市の先行事例が全国的に知られている。例えば南魚沼市では、本号が発行される7月初旬の段階で、大小11棟の雪室が稼働(取材後、初夏に稼働開始の雪室も含む)しており、日本酒やワイン、コ



三国街道・塩沢宿の雰囲気再現した雁木の街並み「塩沢宿牧之通り」は国内外の観光客に大人気

災害時などの電源喪失対策に 絶大な雪室の効果

南魚沼市内で雪室を活用した建物の冷房設備としては、新潟県南魚沼地域振興局(以下、南魚沼地域振興局)の庁舎冷房の事例が、雪

シヒカリなどの米や野菜、海産物などの貯蔵のほか、キノコづくりも行われている。

独特の熟成効果もある「雪室貯蔵」は、素材はもとより、その素材を使った二次製品・三次製品についても、高い付加価値と消費者の支持を得ることに成功している。「雪室貯蔵」そのものが既にブランド化(南魚沼ブランド)の大きな要因となっているのだ。

南魚沼市

市 政 ル ポ

(新潟県)



豊富な水量と優れた水質で魚沼盆地の農業の基盤となってきた魚野川



日本3大奇祭「裸押合大祭」で知られる上杉謙信ゆかりの古刹、浦佐毘沙門堂(うらさびしゃもんどう)・普光寺



1300年前の奈良時代創建とされる雲洞庵(うんとうあん)は、上杉景勝・直江兼統主従ゆかりの名刹

室の原理という意味からも分かりやすい。

南魚沼地域振興局は南魚沼市本庁舎から近い旧・六日町地区の中心市街地に立地するが、平成14(2002)年からの庁舎建て替えの際に雪室を設置。冬に降った雪を貯蔵し、夏に活用する雪冷房設備を導入した。雪室で発生する冷気を送風機で各部屋に送り、床面から冷気を吹き出させる。冷気が部屋で暖気に変化したら、天井から回収して雪室に送り返す「直接熱交換冷風循環方式」を採用。これはその他の雪室でもよく採用される方式だが、南魚沼地域振興局の延床面積5592㎡の約11%に当たる643㎡(建物1階の県民ホールや会議室など)分の冷房効果を発揮し、今日に至っている。

雪が少ないと効果が減るのは雪室の弱点といえないこともない。しかし、特別豪雪地

帯の南魚沼市では雪不足が何年も続くことは考えにくい。排出ガスおよび光熱費などの削減は、長期間のランニングコストを含め、南魚沼地域振興局でもトータルでかなりの抑制効果を発揮している。これは全ての雪室の事例にいえることだ。

「現状の事例だけでなく、雪室の活用に関しては今後さらに多彩な可能性が考えられます。例えば、既に他地域で事業化が進みつつある事例でいえば、データセンターのサーバーから排出される膨大な量の熱の冷却化も、雪を冷熱源とする雪室の冷却効果を活用すればクリーンに、安定的に、安価に果たせ

ます。

また、東京の豊洲市場のような超大型冷蔵設備が必要な施設でも、冬の間は雪国で膨大に降る雪を貯蔵して活用すれば、SDGsの理念にかなった冷蔵・冷房施設が可能かもしれません。これについては、実際、南魚沼の雪を使ってみませんか、東京都に提案したこともあります。具体的な話には進みませんが、コロナ禍が収束すれば豊洲市場には世界中から観光客が訪れるはず。脱炭素にぴったりの雪室の活用は、世界的な話題になると思います(林市長)

さらに、雪室を使った倉庫は「電源喪失対策としても大きな効果を見込めるはず」と林市長。「何らかの災害や事故などが原因と



刈り入れを待つコシヒカリは魚沼地域のまさに宝

なって電源喪失した場合、社会機能の多くが《オール電化》で動いている日本社会は、大混乱になります。その際にも雪室は、食糧や医薬品などの冷蔵備蓄に大きな効果を発揮することでしょう」

確かに震災時などに大規模避難所になるような場所に雪室があれば、停電対策の一環として心強い存在になる。例えば停電になっても冷房効果は途切れない。避難生活に不可欠な薬品類や飲料・食品類も安全に冷蔵備蓄できる。そのようなことを踏まえ、林市長は「ゆくゆくは冷蔵倉庫群の建設計画を誘致し、雪を冷熱源にした倉庫地帯の構築を南魚沼市で実現していきたい」と語る。

雪の産業化が持続可能なまちづくりの要になる理由

「それは、南魚沼市が単に豪雪地帯だという理由だけで言うものではありません。東京都(練馬区)と新潟県(長岡市)を結ぶ関越自動車

道によって、南魚沼市は関東地方・北陸地方の出入口、結節点に位置しています。また全通の時期はまだ明確ではありませんが、直江津港を有する上越市から十日町市を經由し、南魚沼市に至る上越魚沼地域振興快速道路(以下、上沼道)は現在、全長約60kmのうち約16kmが開通しています。この上沼道が全通すれば、関越自動車道と合わせ、北陸方面への交通高速化がさらに進みます。

南魚沼市は現在でも、物流拠点に最適なアクセスの良さがありますが、上沼道が完成すればその効果は倍加するはず。さらに物流拠点に、雪室による環境にやさしい冷蔵貯蔵が可能な倉庫群が造られれば、単なる物流拠点以上の存在になります。安価で安全に冷蔵貯蔵ができる上、雪室による食材や飲料の熟成効果が加わり、付加価値がものすごく高まる。南魚沼市の《ふるさと納税》返礼品に見られるように、雪室貯蔵のコシヒカリや野菜類、酒やワインなどに対する絶大な人気も、既にそれを明確に物語っています。

さらに、先ほど申しました医薬品のアクセス良好な冷蔵貯蔵基地として機能していくこともできます。必然的に雇用の場が創出され、南魚沼市や魚沼地域からいったん離れていった若者たちが《帰って来られるまちづくり》にもつながっていくことでしょう。

現在はまだ『たら・れば』に近い世界かもしれませんが、達成すべき目標はしつこく言い続け、実現に向け行動し続けることが肝



若者・移住者向けに雇用の場を紹介する「メイドイン南魚沼・企業を知る展」(南魚沼市図書館)

要です。私が市長に就任以来、『今度の市長は雪遊びが過ぎる』と揶揄されてもめげずには雪遊びが過ぎる」と揶揄されてもめげずには(笑)、一貫して雪にこだわり、雪の産業化の推進こそが持続可能なまちづくり、SDGs になかったまちづくりの《肝》だと言いつづけているのも、そのためなのです(林市長)

あまりにも多過ぎる雪は、古来、豪雪地帯に暮らす人々にとって大変な重荷であったことは想像に難くない。それは現在も同様で、「正直なところ、雪をネガティブなだけの存在と考える方は、地元や周辺地域でもまだまだ少なくない(林市長)のも事実だろう。

しかし、魚沼地域の雪は古来、地域の人々にとっては生活の糧であり、文化の源でもあった。雪国の暮らしを描いて江戸時代のべ

南魚沼市

市 政 ル ポ

(新潟県)



1200年以上の歴史を誇る越後上布の雪さらしは冬の風物詩

ストセラーとなった塩沢出身の文人・鈴木
牧之の『北越雪譜』には、雪国の暮らしの厳し
さと同時に、現在では国指定重要無形文化財
となつている越後上布が、布地を雪の上にと
らす《雪さらし》を経ないと成立しないもので
あることや、雪にまつわる各種の生活の知
恵、雪の中でも元氣な子どもたちの様子など
も、風物詩として情感豊かに描かれている。
また、米どころ・酒どころとしての魚沼地域
を支えている要因が、毎年の豪雪がもたらす
豊富な伏流水であることは古来、地域の人々
にもよく理解されてきた。

地域の人々にとって「愛憎半ばする存在」
だった雪を、持続可能な近未来まちづくりの
推進エンジンにしようとする林市長の試み

は、雪国の原点である雪のイメージを一新す
る取り組みともいえる。

林市長は就任以来、スキー場が市内に10カ
所ある環境を活用し、スノーボード専用ゲレ
ンデヤーフパイプの練習施設「ガンホー・
モンスターパイプ」、スノーボーダーたちの
夏のトレーニングにも欠かせないスケート
ボード場「南魚沼市スケートパーク」などの整
備に尽力し、国内外のアスリートたちの熱視
線を集めている。

さらに、真夏の五輪となる東京2020オ
リンピック・パラリンピック競技大会に先駆
け、雪室で貯蔵した雪をビーチバレーなどの
イベント会場に運んで《夏にも使える雪》のデ
モンストレーションを行ったり、雪のエコフ
ルな効果を環境省に報告・提言するなど、雪
を前向きに発信する取り組みを、機会あるご
とに展開してきた。

一方で農業、林業、観光の振興など地域経
済の活性化に加え、SDGsの理念にのっ
とった持続可能なまちづくりの基盤である
《医療のまちづくり》にも令和2年度から着
手。「人口当たりの医師数や医療機関数が全国
で最も少ない、まさに地域医療の課題を地で
行く南魚沼市」(林市長)において、将来にわ
たり持続可能な市立病院群を中心とする、地
域包括ケア体制の構築に向けた取り組みも開
始している。

意外に忘れられがちだが、明治20年代の新
潟県には、東京を超えて人口が日本一だった

時期が何度かある。当時は第一次産業中心の
時代で、中でも米どころ・酒どころの新潟県
には雇用の場がたくさんあったからだ。やが
て急速な工業化とともに、首都圏やその他の
地方への人口流出が続く、その流れは今日に
まで至っている。

人口を日本一に戻すことは不可能でも、雪
国ならではの地域資源である雪の産業化を媒
介に、多方面での活性化を進め、雇用の場が
増えていけば、人口再流入の可能性は夢では
ない。

林市長が推進する、一連の《冷たい雪》を
《熱い夢》に換える取り組みには、そんな可能
性を十分に感じさせる説得力がある。

(取材・文〓遠藤隆／取材日令和3年4月21日)



毎年の積雪量はカマキリの営業の高さで分かるという「雪国の知恵」をアート化したカマキリのオブジェ